

すな はらい い せき
砂 払 遺 跡

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

すな はらい い せき
砂 払 遺 跡

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

序

私たちの飯田市は、中央アルプスと南アルプスに挟まれた伊那谷の南部に位置し、古くから交通の要所として栄えてきました。そして、美しい自然に恵まれ、長い歴史と貴重な伝統文化に包まれた、人情豊かなまちとして知られています。

砂弘遺跡が存在する羽場地区は、飯田のシンボルともいえる風越山と飯田市の中心市街地である飯田城下町との間にあります。江戸時代には伊那谷と木曾谷を結ぶ「大平街道」が通っていた場所でもありました。近年には中央自動車道西宮線の通過をはじめ、区画整理によりインフラが整備されて、急速に宅地化・商業地化が進んでいます。こうした中で、かつての主要な道路であった大平街道一現 県道幸助・飯田線一の改良は自然の流れといえましょう。

計画地一帯は埋蔵文化財包蔵地「砂弘遺跡」の一面にあたります。埋蔵文化財は文字どおり地下に埋もれているため、なかなか身近に感じられることが難しいかと思えます。しかし、埋蔵文化財は私たちの祖先の足跡を示しており、この地の歴史を雄弁に語ることができます。このような文化財は、一度壊すと二度と元通りにすることはできません。できる限り現状で保存するのが最善といえますが、現代社会の基盤整備との間では記録保存により後世に伝えることもやむを得ないことと考えております。結果は本書の内容のとおり、これまで知られていなかった縄文時代晩期にも人々の営みがあったこと、また当地の被災の歴史も垣間見ることができました。

今後、本書が広く活用されるとともに、地域の皆様に歴史と文化財が身近に感じられるようになれば幸いです。

最後になりましたが、文化財保護にご理解を賜りご協力いただきました関係者の方々に、深甚なる感謝を捧げまして発刊の辞といたします。

平成20年3月

飯田市教育委員会

教育長 伊 澤 宏 爾

例 言

1. 本報告書は、平成18年度 県単道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託および平成19年度 県単道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託により実施された埋蔵文化財包蔵地砂払遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査箇所は、飯田市砂払町2丁目1210番地他 (主) 飯田南木曾線 飯田市針ヶ平～羽場である。
3. 発掘調査は飯田建設事務所長の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
4. 調査は、羽生俊郎が担当した。平成18年度に現地調査を、平成19年度に整理作業および報告書作成作業を行った。
5. 今次調査の図面類・遺物の注記には、「SNH」の記号を、遺構には以下の記号を用いた。
SK：土坑、SX：不明遺構
6. 本遺跡に於ける発掘調査位置は、飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図の区画、Ⅷ-Lc74 12-42 およびⅧ-Lc74 12-43 (社団法人日本測量協会 1969「国土基本図図式 同適用規定」参照) に位置する。グリット設定は飯田市新埋蔵文化財基準メッシュに基づいて、有限会社M2クリエイションに委託した。
7. 土層観察については、小山正忠・竹原秀男 2005『新版標準土色帖』による。
8. 遺構・遺物の計測値のうち、未調査、破壊・破損等の数値は現存値を()内に示した。
9. 遺構実測図の線については、上端は太線、下端は細線、破線は推定のライン等を表現している。
10. 遺物実測図におけるスクリーントーンは、剥離・欠損等を表現している。
11. 本書は羽生俊郎が執筆・編集し、山下誠一が総括した。現場での遺構写真は羽生俊郎が撮影し、遺物写真については、西大寺フォト 杉本和樹に委託した。
12. 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

目 次

本文目次

序	
例 言	
目 次	
第Ⅰ章 経 過	
第1節 調査に至る経過と過程 …………… 1	
(1) 調査に至る経過 …………… 1	
(2) 調査の経過 …………… 1	
(3) 作業日誌 …………… 1	
第2節 調査組織 …………… 2	
(1) 調査団 …………… 2	
(2) 事務局 …………… 2	
(3) 指導・協力 …………… 2	
第Ⅱ章 遺跡の環境	
第1節 地理環境 …………… 3	
第2節 歴史的環境 …………… 5	
第Ⅲ章 調査結果	
第1節 調査区の設定 …………… 7	
第2節 基本層序 …………… 11	
第3節 遺構と遺物 …………… 12	
(1) 縄文時代 …………… 12	
(2) 中近世 …………… 14	
(3) その他 …………… 14	
第Ⅳ章 調査のまとめ …………… 27	
引用参考文献 …………… 28	
抄 録 …………… 39	

挿図・図版目次

挿図1 遺跡位置図 …………… 4	挿図17 小穴割付図⑤ …………… 23
挿図2 調査区位置図 …………… 6	挿図18 小穴割付図⑥ …………… 24
挿図3 基準メッシュ図区画方法1 …………… 8	挿図19 小穴割付図⑦ …………… 25
挿図4 基準メッシュ図区画方法2 …………… 9	挿図20 不明遺構01 …………… 25
挿図5 基準メッシュ図区画方法3 …………… 9	挿図21 遺構外出土遺物 …………… 26
挿図6 基準メッシュ図区画方法4 …………… 10	図版1 遺跡遠景・調査前 …………… 31
挿図7 基準メッシュ図区画方法5 …………… 10	図版2 I区上層・II区上層・III区上層・ IV区 …………… 32
挿図8 基本層序 …………… 11	図版3 I区下層・II区下層・III区下層・ III区小穴群 …………… 33
挿図9 土坑01・02 …………… 13	図版4 土坑01・土坑02・不明遺構01 …………… 34
挿図10 土坑01・02出土遺物 …………… 13	図版5 重機作業・測量作業・掘削等作業 …… 35
挿図11 遺構全体図 …………… 15	図版6 土坑01出土遺物・同上(裏) …………… 36
挿図12 小穴割付図 …………… 15	図版7 土坑02出土遺物・遺構外出土遺物 …… 37
挿図13 小穴割付図① …………… 19	図版8 遺構外出土遺物 …………… 38
挿図14 小穴割付図② …………… 20	
挿図15 小穴割付図③ …………… 21	
挿図16 小穴割付図④ …………… 22	

第I章 経 過

第1節 調査に至る経過と過程

(1) 調査に至る経過

平成18年1月5日付 長野県飯田建設事務所長より、文化財保護法第94条による「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。工事計画は飯田市砂払町2丁目1210-1において既存道路の拡幅を行なうものである。当該地は埋蔵文化財包蔵地砂払遺跡内に位置することから、試掘調査を実施し、発掘調査計画立案・費用積算等を行なうこととなった。

平成18年4月26日付で、飯田建設事務所長 塩野敬一と飯田市長 牧野光朗との間で埋蔵文化財発掘調査業務の委託契約を締結し、同年6月16日に試掘調査を実施した。重機によりトレンチ調査を実施した。その結果、地表下約80cmで遺構が検出された。よって、道路建設に先立っては記録保存のための発掘調査を実施することとなった。さらに隣接地（飯田市砂払町2丁目1221、飯田市正永町1丁目1266-1）についても道路拡幅計画があり、平成18年7月10日付で文化財保護法第94条の通知が提出された。埋蔵文化財の状況は試掘調査実施箇所と同様とみられ、併せて発掘調査を実施することとした。

(2) 調査の経過

以上の経過を経て、平成18年8月22日付で再度委託契約を締結し、11月8日より現地の作業に着手した。重機により表土の除去を行なった。その後委託により基準点設置を行ない、手作業により遺構の検出・掘削・記録作業を実施した。

なお、遺構検出面が上下2面存在するため、上層の調査を終了後、さらに掘り下げて下層の調査を進行した。また、調査区域と排土の都合により、調査地をⅠ～Ⅳ区に分割し、折り返して調査を実施した。調査終了後は、排土の埋め戻しを行ない、12月18日に現地での作業を終了した。

翌平成19年度は、飯田市考古資料館にて、資料の整理作業と報告書刊行を行なった。

(3) 作業日誌

11月8日	Ⅰ区上層調査開始、重機作業。	11月17日	基準点設置、遺構検出、遺構掘削、実測、写真撮影、Ⅰ区下層調査終了。
11月9日	基準点設置。		
11月10日	機材搬入。	11月20日	作業中止。
11月13日	遺構検出、遺構掘削開始。	11月21日	作業中止。
11月14日	遺構検出、遺構掘削、遺構実測。	11月22日	作業中止。
11月15日	遺構掘削、遺構実測、写真撮影、Ⅰ区上層調査終了。	11月23日	重機作業。
11月16日	Ⅰ区下層調査開始、重機作業。	11月24日	Ⅱ区上層調査開始、重機作業。
		11月27日	基準点設置、遺構検出、遺構掘削。

11月28日	遺構検出、遺構掘削。	12月11日	写真撮影、Ⅲ区上層調査終了。
11月29日	遺構検出、遺構掘削、遺構実測、写真撮影、Ⅱ区上層調査終了。		Ⅲ区下層調査開始、重機作業。
11月30日	Ⅱ区下層調査開始、重機作業。	12月12日	基準点設置、遺構検出、遺構実測。
12月1日	基準点設置、遺構検出・遺構実測、写真撮影、Ⅱ区下層調査終了。	12月13日	写真撮影、Ⅲ区下層調査終了。Ⅳ区調査開始、重機作業。
12月4日	Ⅲ区上層調査開始、重機作業。	12月14日	遺構検出、遺構掘削、遺構実測、写真撮影、Ⅳ区調査終了。
12月5日	基準点設置、遺構検出、遺構掘削。	12月15日	重機作業、機材搬出。
12月6日	遺構検出、遺構掘削、遺構実測。	12月16日	重機作業。
12月7日	同上。	12月18日	機材搬出、現地調査完了。
12月8日	雨天中止。		

第2節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長		伊澤 宏爾	
調査担当者	羽生 俊郎			
調査員	馬場 保之	澁谷恵美子	下平 博行	坂井 勇雄
発掘作業員	金井 照子	小島 康夫	小平まなみ	佐々木政充 竹本 常子
	中村地香子	福沢トシ子	松下 省三	宮内真理子 森藤美知子
整理作業員	関島真由美	中平けい子	福沢 育子	宮内真理子

(2) 事務局

飯田市教育委員会				
教育次長		中井 洋一 (平成18年度)	関島 隆夫 (平成19年度)	
生涯学習課長		小林 正春 (平成18年度)		
生涯学習・スポーツ課長		宇井 延行 (平成19年度)		
生涯学習・スポーツ課長補佐		竹前 雅夫 (平成19年度)		
文化財保護係長	馬場 保之 (平成18年度)	山下 誠一 (平成19年度)		
文化財保護係	宮澤 貴子	澁谷恵美子	下平 博行	坂井 勇雄 羽生 俊郎

(3) 指導・協力

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理(挿図1)

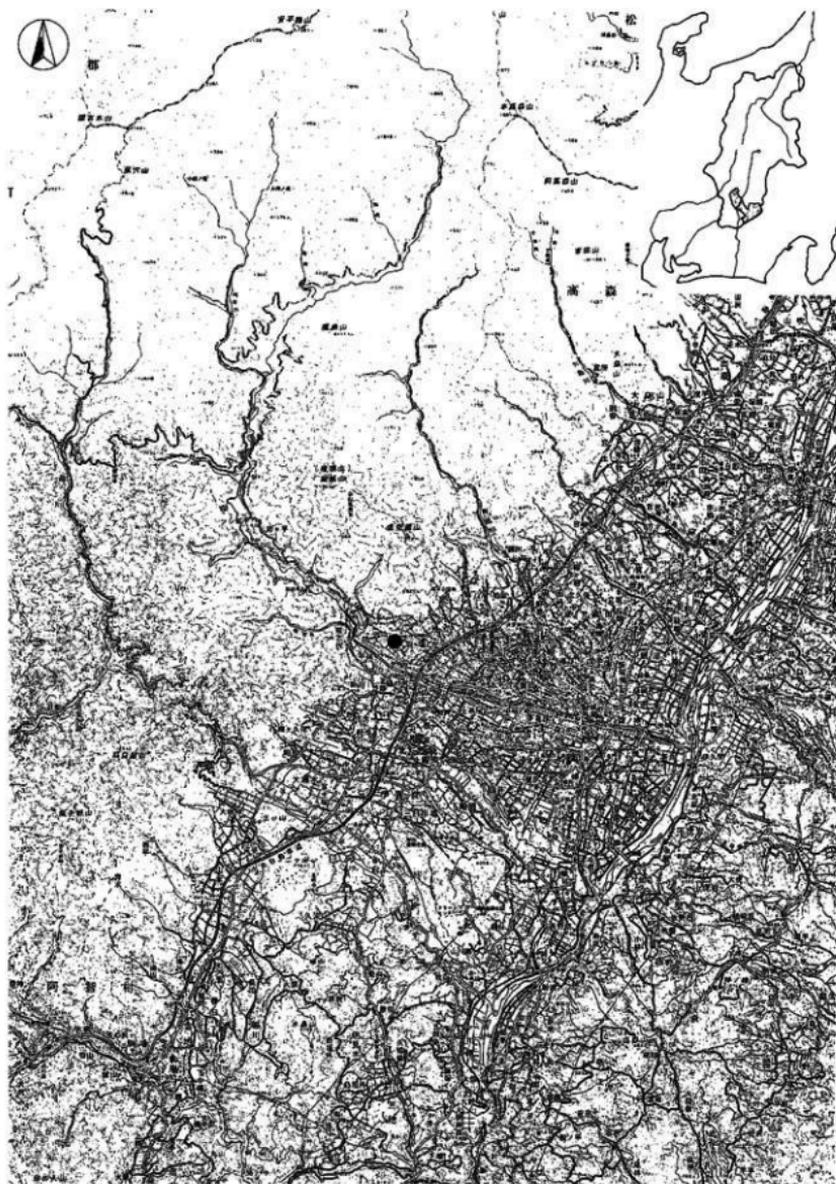
飯田市は、長野県の南部を並走する中央アルプスと南アルプスに挟まれた、俗に伊那谷と呼ばれる伊那盆地の南部を中心とし、平成17年10月1日に上村・南信濃村の2村と合併したことにより、赤石山地と伊那山脈に挟まれた遠山郷と呼ばれる地域も含んでいる。

伊那谷は南北に約100kmと長く、中央を天竜川が南流している。北は諏訪地方・塩尻地方に、南は天竜川と秋葉街道伝いで遠州地方に、西は神坂峠や矢作川伝いで三河地方にそれぞれ通じており、長野県の南の玄関口といえる場所にある。このような地理的条件から交通の要衝といえ、多くの街道が飯田を通過し、また起点としている。伊那街道は明治以降三州街道と呼ばれ、現在の国道153号線となり、下街道は現在の国道151号線となり、秋葉街道は現在の国道256号線および同152号線が該当する。また大平街道は県道 幸助・飯田線が該当し、中山道へと通ずる。いずれも中世末期から近世にかけて整備され、現在の路線となった。

伊那谷には、天竜川の両岸に国内でも有数の段丘が形成されている。伊那谷の基盤地質は領家帯に属す花崗岩・片麻岩である。一方伊那谷の東、赤石山地と伊那山脈の間には、中央構造線が走っており、三波帯・戸台構造帯・秩父帯・四万十帯が南アルプスを構成している。伊那谷の形成は、約250万年前に天竜川が流れ始めたことから始まる。約200万年前から赤石山地が隆起を始め、続いて約80万年前から中央アルプス・伊那山脈が急激に上昇を始めた。この山塊の上昇により扇状地の発達と逆断層の活動とが繰り返され、幾重もの構造段丘を発達させた。この構造段丘は伊那谷の地形的特徴であり、地質学上では、火山降下物の堆積を基準として、高位面、高位段丘・古期扇状地、中位段丘・中期扇状地、低位段丘Ⅰ・新期扇状地、低位段丘Ⅱの5つに大きく編年されている(下伊那地質誌編纂委員会 1976『下伊那の地質解説』)。一般的には俗に上段と呼ばれる高燥地と、下段と呼ばれる低湿地に大別される。これらの段丘は、天竜川に注ぎ込む支流の作用により、扇状地や田切地形、自然堤防などを形成するため、さらに複雑な地形となる。

当遺跡の所在する羽場地区は、飯田市市街地の西側に隣接し、南は松川により大きく開折され、西は円越山をはじめとする中央アルプス前衛の山々に囲まれ、北は阿弥陀沢川により丸山地区と接する。山麓から流れ出る阿弥陀沢川・滝の沢川等により形成された扇状地と構造段丘を中心とした地域であり、全体的に南東に傾斜している。当遺跡はやや扇頂よりの扇状地にあり、南側を小河川である円悟沢川が流れ、西側に比高差10数mの段丘がある。円悟沢川周辺および段丘崖(断層崖)直下は、湿地化している。調査地点の標高はおよそ560mを測る。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12℃を超え、2月の平均気温は1.4℃、8月の平均気温は24.4℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示す。一方降水量は年間雨量約1600mm、梅雨と台風シーズンにピークを迎え、冬には少ない。



挿圖1 遺跡位置圖

第2節 歴史的環境

旧石器時代の飯田市は、山本地区の石子原遺跡・竹佐中原遺跡において、旧石器時代初頭、あるいはそれ以前に遡る可能性のある石器群が出土している。この他の資料は断片的で、不明な点が多い。

市内では縄文時代に入ると、河川に面した低位段丘上に草創期の遺物が散在する。その後西側の山麓周辺に遺跡が集中し、時期が下るとともに台地先端へと遺跡の分布が広がる。縄文時代中期になると、山麓から下段にまで、爆発的に遺跡数が増加する。しかしながら縄文時代後期から晩期にかけては市内他地域と同様に遺跡数は極端に減少し、わずかに権現堂前遺跡のみとなる。この権現堂前遺跡は縄文時代後期後半から晩期が主体で、当該期の拠点的な遺跡と捉えられよう。

弥生時代に入ると、前述の権現堂前遺跡から東海的な条痕文系土器が出土しており、稲作の萌芽期にも人々が居住していたことが推測される。しかし、市内全域をみても弥生時代前期の遺跡数は少なく、遺跡数が増加するのは弥生時代後期に入ってからである。下段では比較的規模の大きい集落が形成され、上段では拠点的な大規模集落もみられるが、小規模な集落が散在する状況である。山麓の裾部や段丘崖下等で発達する湧水や、小河川を利用した水田耕作と台地上の畑作が生活基盤であったと推定される。

当地域は、縄文時代晩期から弥生時代の間は大規模な洪水に見舞われたらしく、黄褐色の砂が広範囲に分布している。今次調査で上層の以降検出面としたのは、この頃の洪水砂であると考えられる。

古墳時代の中期以降、伊那谷では竜丘・松尾・上郷・座光寺地区に多くの古墳が築造される。そして、馬具と馬埋葬施設が多いことが特筆され、背景に牧を生産基盤とした集団の存在が推定されている。

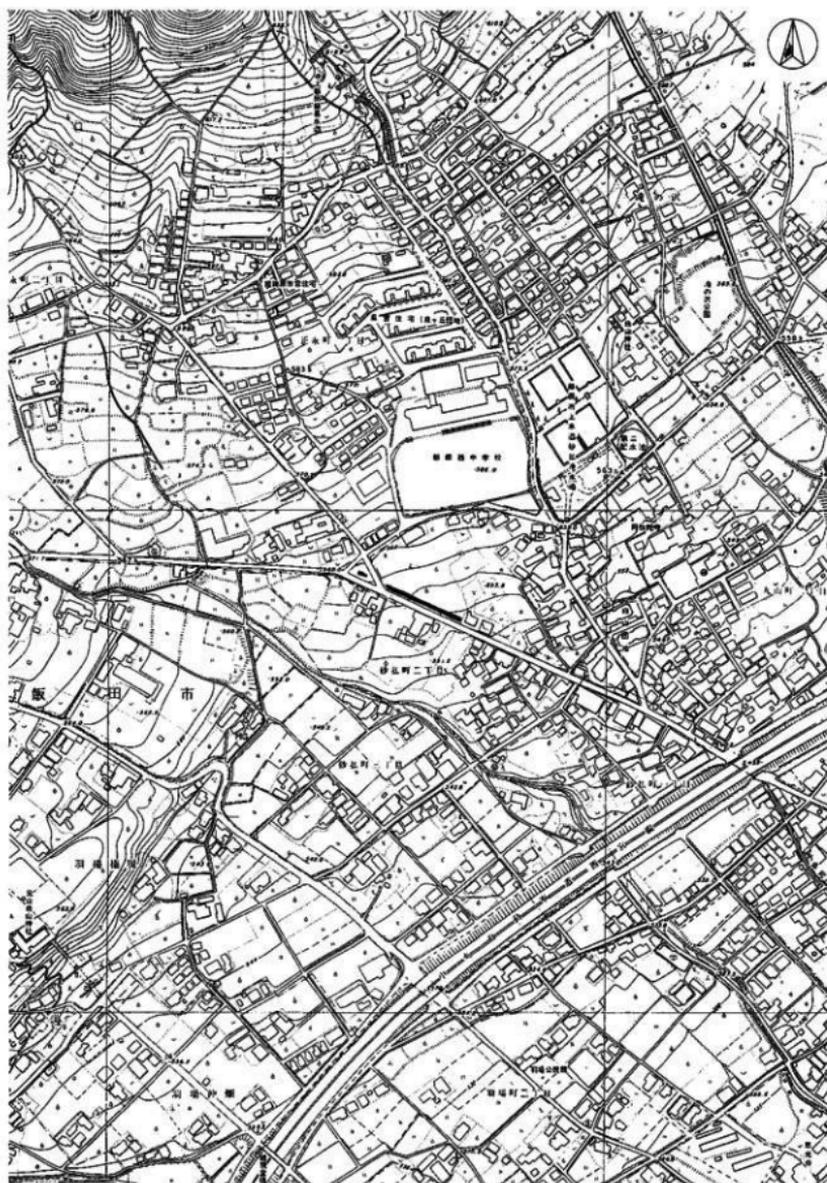
続く奈良～平安時代では、座光寺地区下段の恒川遺跡群から正倉群等が確認されており、古代伊那郡衙に比定されている。当遺跡周辺では、山麓付近にいくつか円墳が存在したことがわかっているものの、考古学的な調査事例に乏しく、古代を通じて状況は不明な点が多い。

文献により、当遺跡周辺は古代伊那郡麻績郷に含まれ、中世は郡戸荘飯田郷に含まれていたとみられる。鎌倉時代から室町初期の飯田郷の地頭は、阿曾沼氏であったことが、室町時代中期には地頭が阿曾沼氏から坂西氏と変わったことが推測される。坂西氏は、室町時代守護職の権威が衰退し在地領主の荘園支配や国衙領の横領が進む中では、飯田城築城や白山社奥社本殿を造営するなど、相当の勢力を有するようになっていったと考えられる。

その後、飯田は武田・織田・徳川・豊臣・堀氏の支配を経て、飯田城と城下町からなる現在の町並みと、各地とを結ぶ街道が整備された。近世を通じて飯田町や周辺の農村では、農業や生糸・和紙・元結・傘・柿・漆器などの小工業が発達し、さらに中馬により全国市場と結びつき、独自の発展を遂げた。特に今次の原因である県道幸助・飯田線は、木曾地方へ通じる大平街道として、大いに栄えた。

明治維新後、飯田城は廃城となり、京風の城下町も昭和22年の飯田大火により灰塵に帰した。また、新たに設けられた鉄道や国道256号線、中央自動車道西宮線の開通により大平街道は廃れ、街道沿いの松川入部落が昭和41年に、大平区が昭和45年に解散となった。一方で当遺跡周辺は、市街地に隣接する利点から住宅街として発展し、近年は区画整理が実施され、一層宅地化・商業地化が進行している。

当遺跡は、縄文時代中期と古墳時代後期の散布地である。これまで数回試掘調査が実施されているが、具体的な遺構は確認されておらず、遺跡の詳細は不明である。



0 50m

挿図2 調査区位置図

第三章 調査結果

第1節 調査区の設定（挿図3～7）

今次調査地点は飯田市砂払町2丁目1210番地他所在、飯田南木曾線沿いの元農地である。発掘調査位置は、世界測地系を用いた飯田市新理蔵文化財基準メッシュ図による区画、Ⅷ-Lc74 12-43に位置する。調査範囲の面積は284㎡、上下2面の合計調査面積は426㎡である。

飯田市新理蔵文化財基準メッシュ図（以下、基準メッシュ図と略す）については、1：50000大縮図地形図（国土基本図）の区画に準じ（社団法人 日本測量協会 1969『国土基本図図式 同適用規定』）、以下のとおりに区画する。

- (1) 基準メッシュ図の1図葉は、昭和43年建設省告示第3059号に示す平面直角座標系による「横メルカトル図法」とする。
- (2) 基準メッシュ図の1図葉は、座標系（飯田市は第Ⅷ座標系に属するので、座標系番号は省略する）のY軸およびX軸を基準として、南北300km東西160kmを含む地域を、30km×40kmの長方形に分割して区画を定め、例えばLCのようにアルファベット大文字の組み合わせにより区画名を表示する（挿図3）。
- (3) 30km×40kmの長方形区画を100等分して、3km×4kmの1:5000図葉に相当する区画に分割する。
1：5000はアラビア数字で区画番号を定め、座標系の区画を横線に結んだ後に続けて、例えばLC-74のように表示する（挿図4）。
- (4) 1：5000図葉を25等分して、0.6km×0.8kmの長方形小区画に分割する。区画番号は挿図5のごとく定め、例えばLC-74 12のように表示する。
- (5) 0.6km×0.8kmの長方形小区画を48分して、100m×100mの正方形区画に分割する。区画番号は挿図6のごとく定め、例えばLC-74 12-43のように表示する。
- (6) 100m×100mの正方形区画を2500等分して、2m×2mの正方形小区画（グリッド）に分割する。区画の名称は、正方形区画の南から北に向かってCA～CY・DA～DY、西から東へ向かって0～49とし、例えばDE19のように表示する（挿図7）。

LC - 74

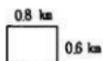
0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
40	41	42	43	44	45	46	47	48	49
50	51	52	53	54	55	56	57	58	59
60	61	62	63	64	65	66	67	68	69
70	71	72	73	74	75	76	77	78	79
80	81	82	83	84	85	86	87	88	89
90	91	92	93	94	95	96	97	98	99



挿図4 基準メッシュ図区画方法2

LC - 74 12

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25



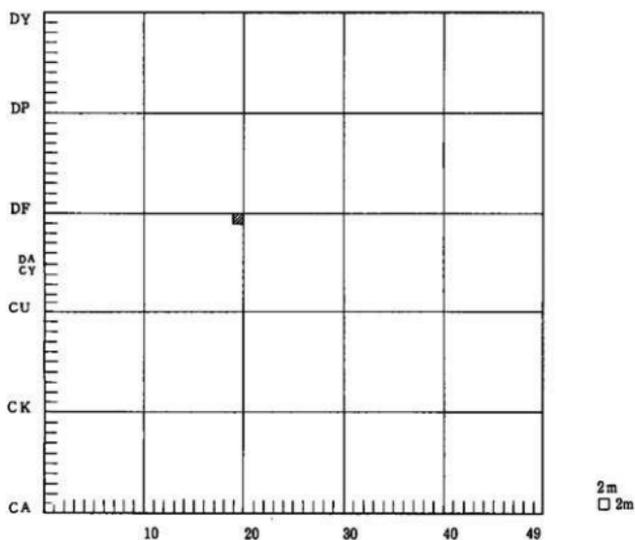
挿図5 基準メッシュ図 区画方法3

LC - 74 12 - 43



挿図6 基準メッシュ図区画方法4

LC - 74 12 - 43 DE 19



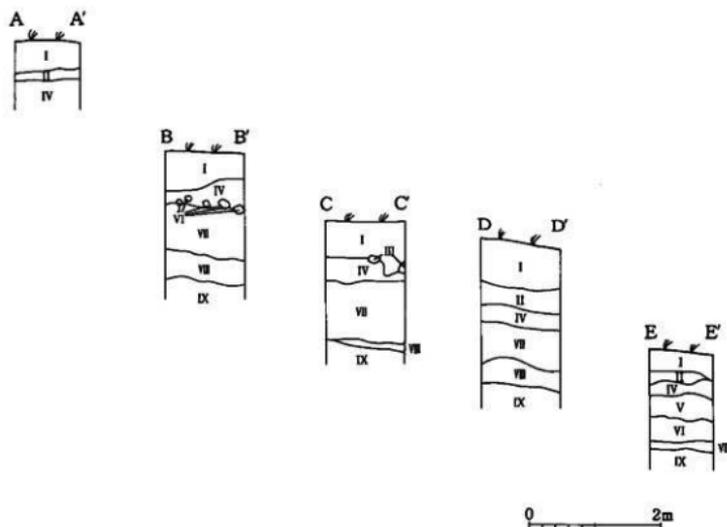
挿図7 基準メッシュ図区画方法5

第2節 基本層序 (挿図8)

IV層上面が第1の遺構検出面であり、今次調査では上層として扱った。周辺の調査事例から、縄文時代晩期から弥生時代にかけての洪水砂とみられる。VII層はIV層堆積以前の表土で、大変黒色化が進んでいる。VII層堆積以前の地山がIX層であり、IX層の上面で調査した調査区および遺構を下層とした。現地は扇状地であり西部山麓から堆積が繰り返されたことを考慮すれば、IX層よりさらに下位にも遺構が存在する可能性はあるものの、これより深く掘削し下位の状態を確認することは、不可能であった。

56000

55500



層位	色	土質	しまり	粘性	備考
I					表土。
II	10YR2/1	黒	SC	△	径2cm以下の花崗岩礫を5%含む。旧表土。
III	2.5Y8/1	灰	S	×	径3cm以下の花崗岩の礫層。洪水砂。
IV	2.5Y5/4	黄褐色	S	×	径1cm以下の花崗岩礫を50%含む。洪水砂。上層遺構検出面。
V	10YR3/1	黒褐色	SC	△	径5cm以下の花崗岩を3%含む。IVとVII層の蓋移層。
VI	2.5Y8/1	灰白	S	×	径1cm以下の花崗岩の礫層。
VII	10YR1.7/1	黒	SiC	△	径5mm以下の花崗岩を5%含む。
VIII	10YR3/1	黒褐色	SiC	△	径5mm以下の花崗岩を5%含む。
IX	2.5Y4/2	暗灰褐色	S	△	径1cmの花崗岩を5%含む。地山。

挿図8 基本層序

第3節 遺構と遺物

(1) 縄文時代

土坑01 (SK01 挿図9・10 図版)

CX-31に位置し、上層で検出した。47×38cmの楕円形を呈し、深さ33cmを測る。出土遺物より、縄文時代晩期前葉の遺構と考えられる。

挿図10-1は、低波状の浅鉢の口縁部である。波頂部には萎縮した杯状把手が付き、直下に三叉文を陰刻する。口縁下の弧線文間と横帯文間には縄文が充填される。外側は研磨され黒色で光沢があり、縄文部の一部に朱色が残る。内側も同じ文様であるが、研磨は弱く灰色を呈している。胎土は、花崗岩に起因するとみられる長石・石英・黒雲母等の約1mm以下の粒子を含み、焼成は良好である。2は、表面は灰色～灰黄褐色であるが、1と同一個体である可能性が高い。朱の痕跡は残っていない。晩期前葉に位置付く。

土坑02 (SK02 挿図9・10 図版)

上層のCX-30に位置し、上層で検出した。172×50cmの楕円形を呈し、土坑内に段差がある。深さは浅い箇所では16cm、深い箇所では25cmを測る。小穴を切る他、土坑内の段差も別の遺構である可能性がある。この点は調査の中では別遺構との確認はできなかった。出土遺物より縄文時代晩期の遺構である。

3は粗製の深鉢の口縁部で、無文とみられる。表面は研磨で調整しているが、凹凸があり、部分的に施してない箇所もある。胎土は、花崗岩に起因するとみられる長石・石英・黒雲母の、径およそ2mm以下の粒子を含む他、断面には藁のような植物質の痕跡も認められる。焼成は比較的良好で黄褐色から灰黄褐色を呈すが、外面には部分的に煤状の付着物がある。4は低波状の深鉢とみられる。胎土には、花崗岩に起因するとみられる径5mm以下の長石・黒雲母等の粒子を多く含み、3と比してやや粗い。

小穴 (挿図12~20)

Ⅲ区上層の、土坑が存在する周辺にいくつかの小穴があり、規模も土坑01と大差ない。出土遺物等、情報が乏しいため、個々の報告は割愛するが、土坑01と同時期の所産である可能性が高い。ただし、今次調査区全域に分布する中世から近世にかけての柱穴とは、遺構の形態、埋土の状況等比較しても、厳密に区分することができなかった。

また下層検出の遺構は、IV層の堆積以前ののものであり、全て縄文時代以前の小穴である。

遺構外遺物 (挿図11)

図化したものは、全てIV層より上から出土した。

土器はいずれも細片であり、もともとの形状や法量を復元することは困難である。1~5は、縄文時代中期初頭から中期中葉にかけての土器の一部とみられる。1は半載竹管状工具により縦方向の鋭い沈線を施されている。胎土には花崗岩に起因するとみられる長石・石英の3mm以下の粒子を含む。良好に焼成されており、灰褐色を呈す。2は半載竹管状工具により浅い沈線を施される。胎土に花崗岩に起因

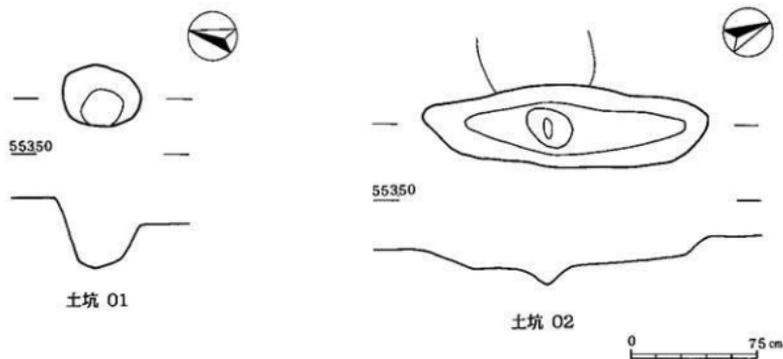


插图 9 土坑01·02

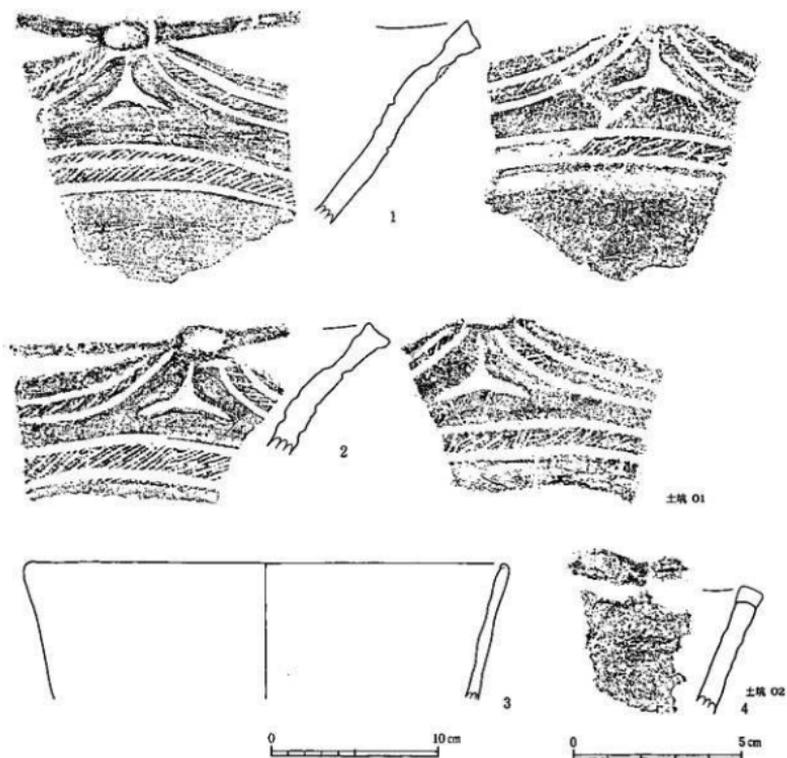


插图 10 土坑01·02 出土遗物

するとみられる長石・石英・黒雲母の径4mm以下の粒子を多く含む。焼成はあまり良くなく、灰黄褐色を呈し、表面は剥離が激しい。3は半裁竹管状工具により強い沈線が施される。胎土に径1mm以下の基目の細かい石英・黒雲母・長石粒子を含み、赤褐色を呈す。焼成は良好で堅い。全体的に磨耗している。4は隆帯の上に、連続した爪形状の刺突あるいは押引による施文を行なっている。胎土に径1mm以下の石英・黒雲母・長石粒子を含み、赤褐色を呈す。焼成は良好で比較的堅いが、全体的に摩滅している。5は隆帯の脇に沈線を施している。胎土は径1mm以下の基目の細かい石英・黒雲母・長石粒子を多く含み、赤褐色を呈す。焼成は比較的良好だがやや脆い。6は単節の縄文を施文後、隆帯を貼り付けている。隆帯には半裁竹管状工具により押引が施されている。胎土に2mm以下の黒雲母・長石・石英等を含み、褐色を呈す。焼成は良好で、堅く締まっている。

7・8は縄文時代後期から晩期にかけての土器である。7は、沈線の下に刺突を施しており、内面・外面ともによく磨かれている。胎土には花崗岩に起因するとみられる長石・石英の4mm以下の粒子を多く含み、焼成は良好である。内面は赤褐色を呈し、外側は黒褐色を呈し黒色の付着物がある。8は土器の底部で、網代痕が残る。復元で79mmを測る。胎土は3mm以下の長石・石英・黒雲母の粒子を多く含み、粗い。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈す。

9～11は縄文時代の石器である。9はⅢ区より出土した硬砂岩製の打製石斧で、10.8×5.2×1.9cm、重量は108gを測る。刃部を中心に表裏とも摩滅が認められる。10はⅣ区より出土した硬砂岩製の打製石斧で、10.6×4.9×1.9cm、重量は89gを測る。刃部を中心とした表面に僅かに摩滅が認められる。11は硬砂岩製の礫器で、交互剥離により粗い刃部を形成している。石核の可能性もある。8.4×6.6×5.0cm、重量は230gを測る。

(2) 中近世 (挿図12～20)

調査区全体の上層で、小穴が多数確認されている。市内の類例からして、中世から近世にかけての柱穴である可能性が高い。ただし、Ⅲ区上層については、上述のとおり一部に縄文時代の遺構が含まれているものとみられ、個々を縄文時代の遺構と区分することはできなかった。加えて調査区全体で攪乱が著しく、具体的に建物規模や構造を確認することはできなかった。

(3) その他

不明遺構01 (SX01 挿図21)

DG-14の上層に位置する溝状の遺構である。試掘調査の検出段階では住居址の可能性が高いと判断していたが、調査の結果、住居内施設等が確認されず、その可能性は低いといえる。調査区外に遺構がかかっており、調査区内での規模は、幅544cm、深さ42cmを測る。時代等、詳細の不明な遺構である。

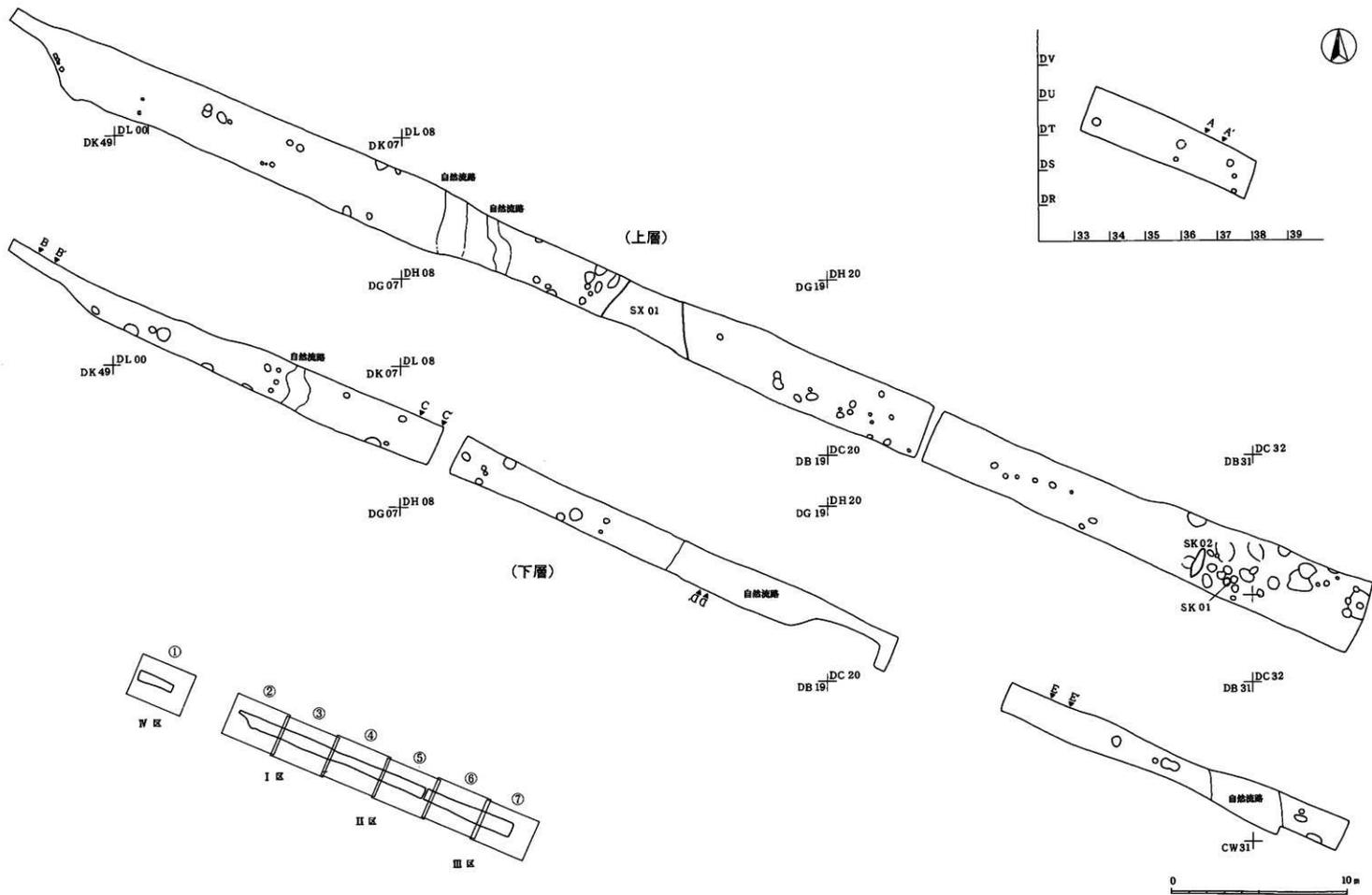
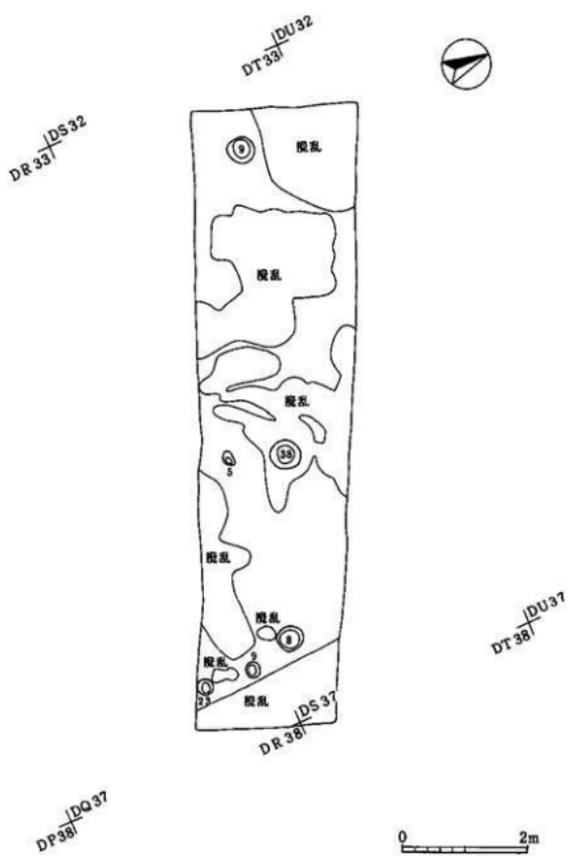
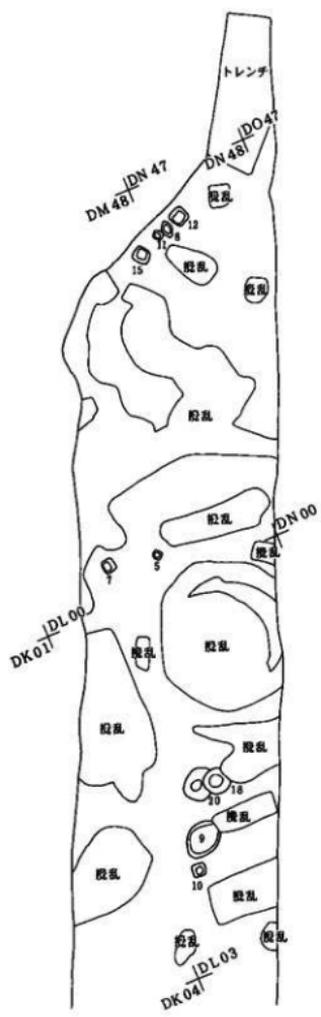


插图10 小穴割付図

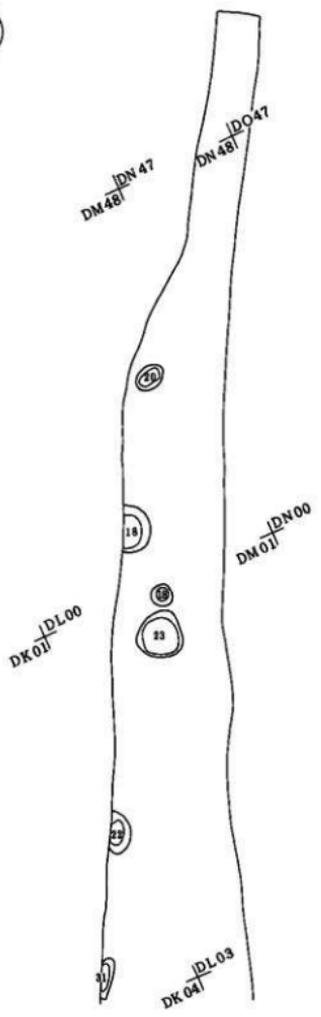
插图11 遺構全体図



挿図13 小穴割付図①



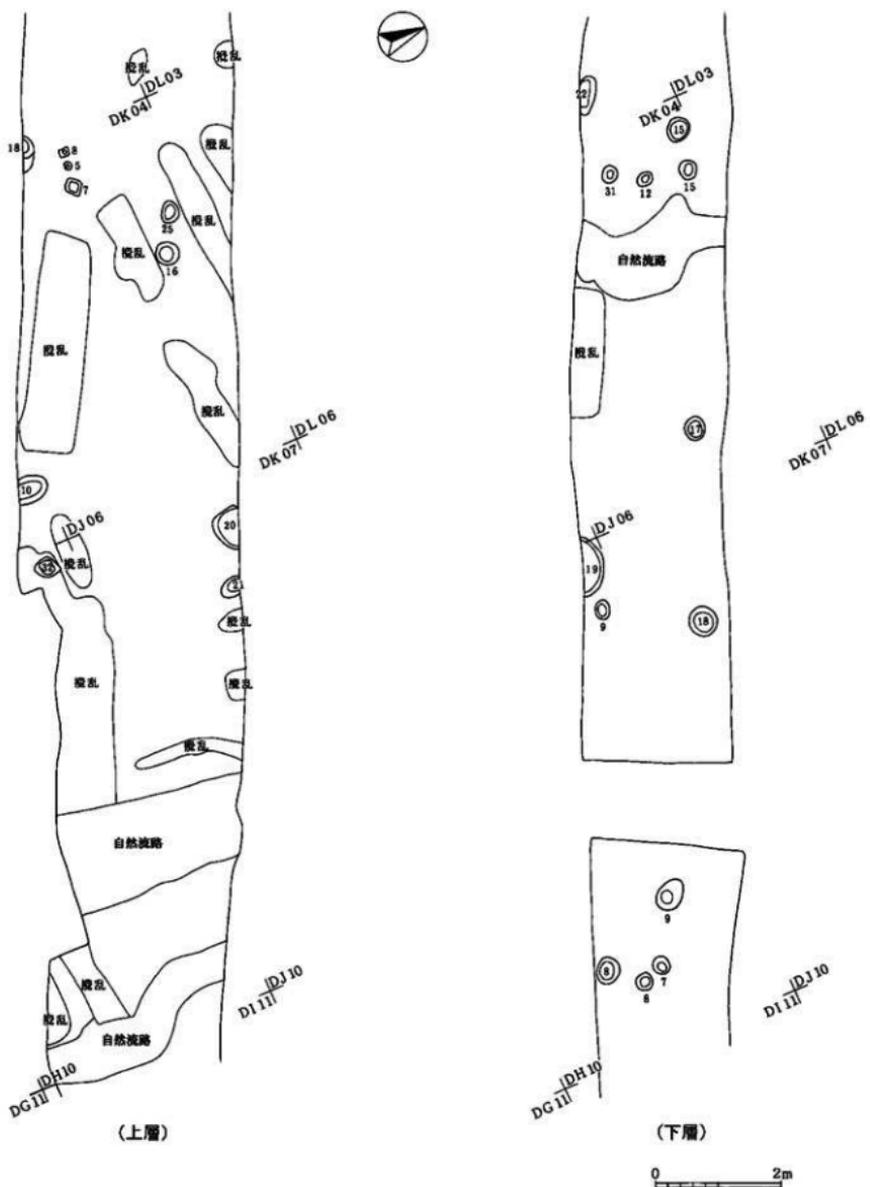
(上層)



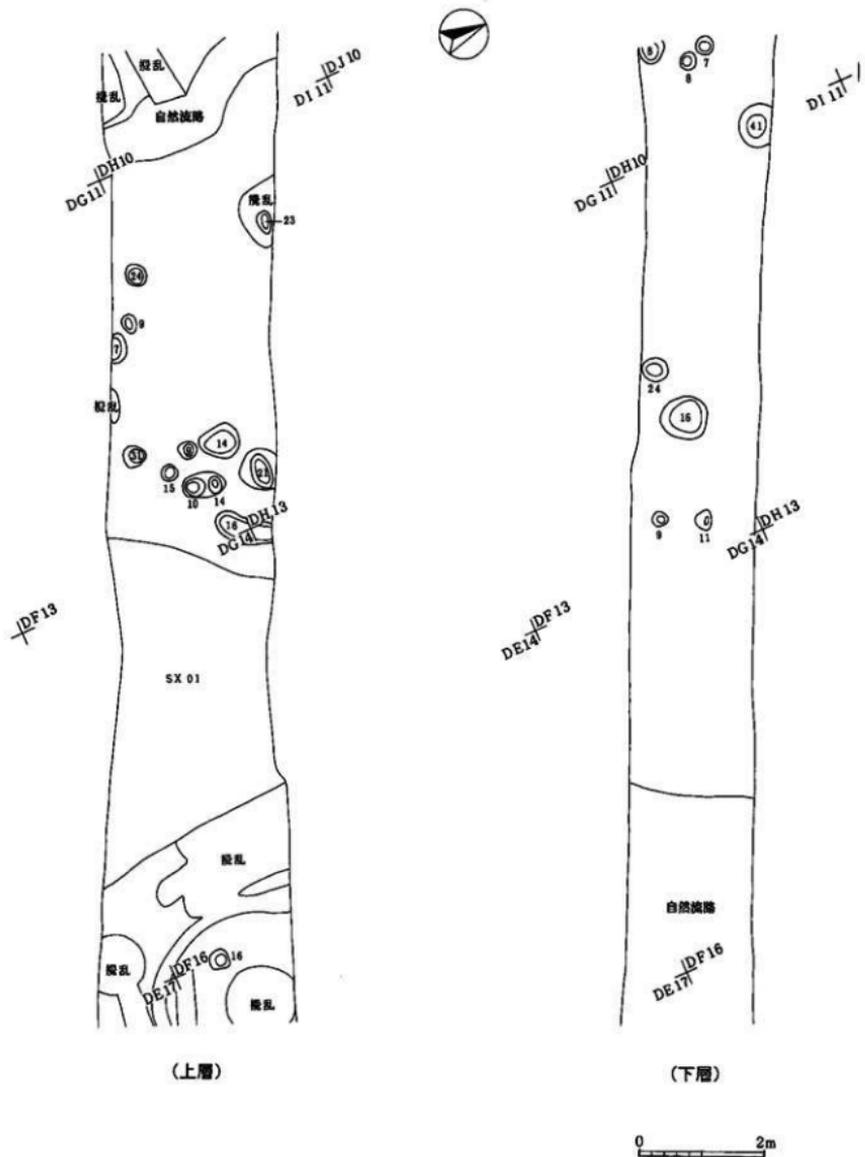
(下層)



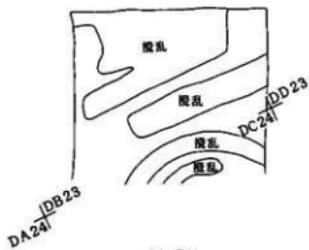
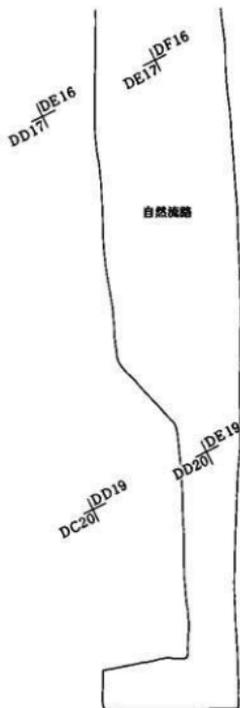
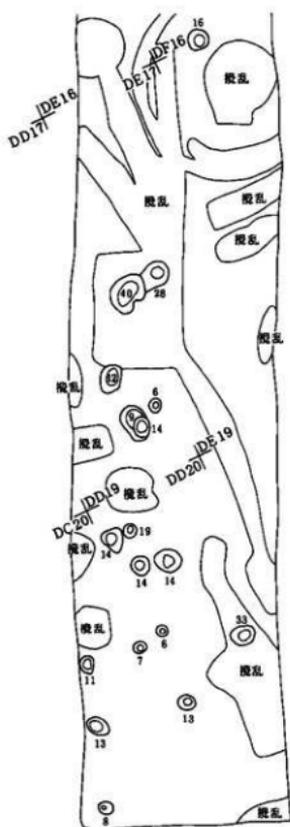
挿図14 小穴割付図②



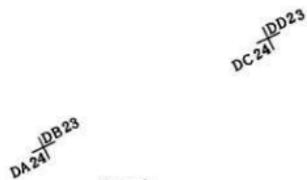
挿圖15 小穴割付図③



挿図16 小穴割村④



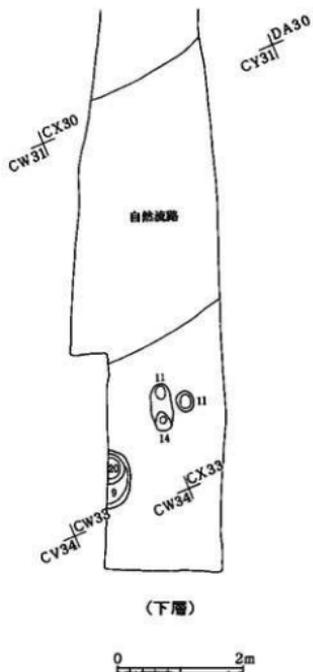
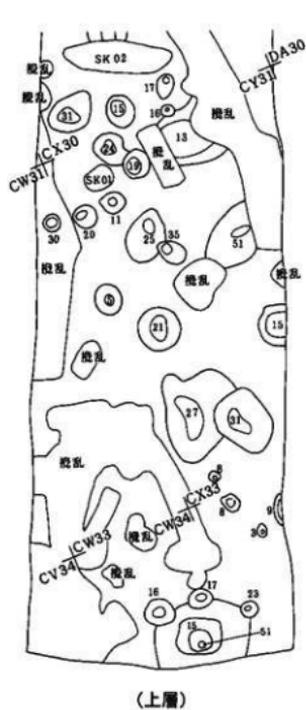
(上層)



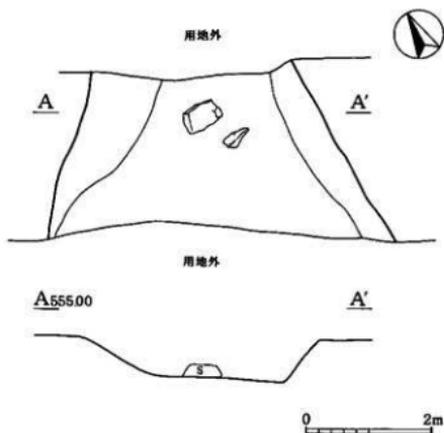
(下層)



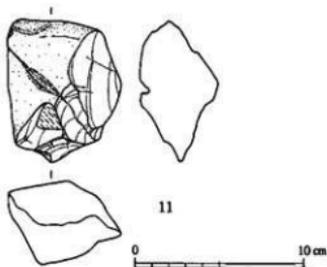
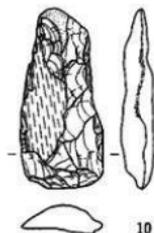
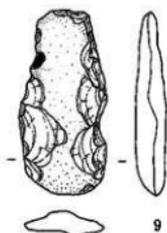
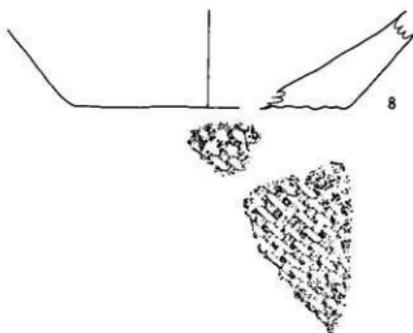
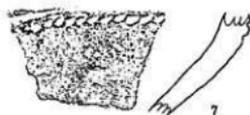
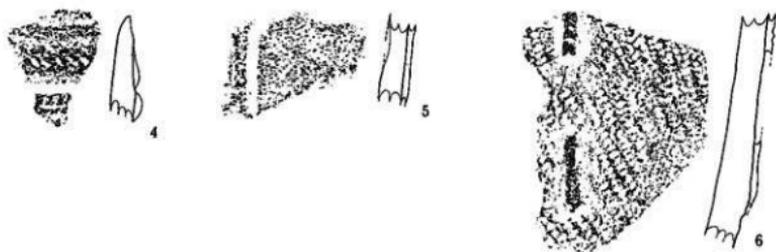
挿図17 小穴割付図⑤



挿図19 小穴割付図⑦



挿図20 不明遺構01



挿圖21 遺構外出土遺物

第IV章 調査のまとめ

砂払遺跡は、これまでの調査では遺構を検出しておらず、その実体は不明であった。今次調査により、これまで知られていた縄文時代中期と古墳時代後期に加え、縄文時代晩期と中近世にも人々の営みがあったことが確認された。しかし、それらは濃密な分布でない。継続的に土地利用を行なったものとは言い難く、また集落構造をあきらかにすることも困難である。さらに当遺跡は大平街道沿いにあるため、近世の街道に関する遺構が存在する可能性もあるが、その確認はできなかった。今後、周辺の状態を把握していく中で、こうした点も明確にすることができるといえる。特に、調査区北東側では、「耕作中に土器類が数多く出土した」との近隣住民の話があり、注意が必要である。

遺跡周辺で確認されている、黄褐色砂層（今次調査では第IV層が相当）は、縄文時代晩期から弥生時代にかけての間に発生した洪水起源とされてきた。当遺跡の南東に隣接する羽場曙遺跡では、今次調査IV層相当層の下の黒色土から、縄文時代後期後葉の凹線文系土器が出土した他、遺構に混入して縄文時代中期～晩期の遺物が少なからず出土している（飯田市教育委員会 2003）。また、伊賀良地区の中村中平遺跡第2地点でも縄文時代晩期中葉以降、弥生時代後期前半までの間に洪水に襲われたことが判明している（飯田市教育委員会 1994）。今次調査地点と中村中平遺跡は、直線距離で約4km離れているが、地形的には、中央アルプス前衛の山麓から発達した新期扇状地上と、その扇状地を流れる河川沿い、標高約550mの上段といった共通点が挙げられる。両者の洪水層が同一の災害時のものかは判断できないが、およそ縄文時代の終末から弥生時代にかけて、飯田市の周辺では大規模な洪水に見舞われたといわれている。

今次調査区では、IV層を掘り込んだ土坑内より、縄文時代晩期前葉の土器片が数点出土している。完形品でなく、数量も十分ではない。そのため、いわゆる墓塚の副葬品とは断定できない。しかし、土器片に摩滅もほとんど認められないことから、遺物は原位置を留めている、若しくは原位置から大きく移動したのではないと考えられる。そして、今次調査地点から500m前後東方の羽場曙遺跡では、黄褐色砂の下層の黒色土から、縄文時代後期後葉の凹線文系土器が出土している（飯田市教育委員会 2003）。土層の堆積状況と位置関係からして、当遺跡と羽場曙遺跡の黄褐色砂は同一のものと思われる。このことから、今次調査区第IV層の形成年代は、縄文時代晩期前葉以前、且つ縄文時代後期後葉以降という極めて短い期間に求めることができる。

ところで洪水砂が縄文時代晩期初頭以前にまで遡ると、縄文時代晩期中葉以降とした中村中平遺跡の結果とは異なる。当遺跡周辺の洪水砂と伊賀良地区の洪水砂は、異なる時期の災害のものである可能性が出てきた。今後の課題であり、類例の増加と各遺跡の遺物出土状況等詳細に観察する必要がある。

なお、付近の小穴や土層からは、縄文時代中期の土器片が出土している。これら土器片は、比較的摩滅の著しいものから比較的摩滅の少ないものまである。原位置を留めているものとはいい難く、もともとIV層より上層にあったか否かも不明であり、洪水砂の堆積時期に言及するには十分とはいえない。

平成19年度発掘調査を実施した方角東遺跡では、やはり洪水砂に弥生時代以降の遺構が掘り込まれているが、その層より上層にも洪水砂が堆積している個所があった。近年では昭和36年の三六災害の際に、

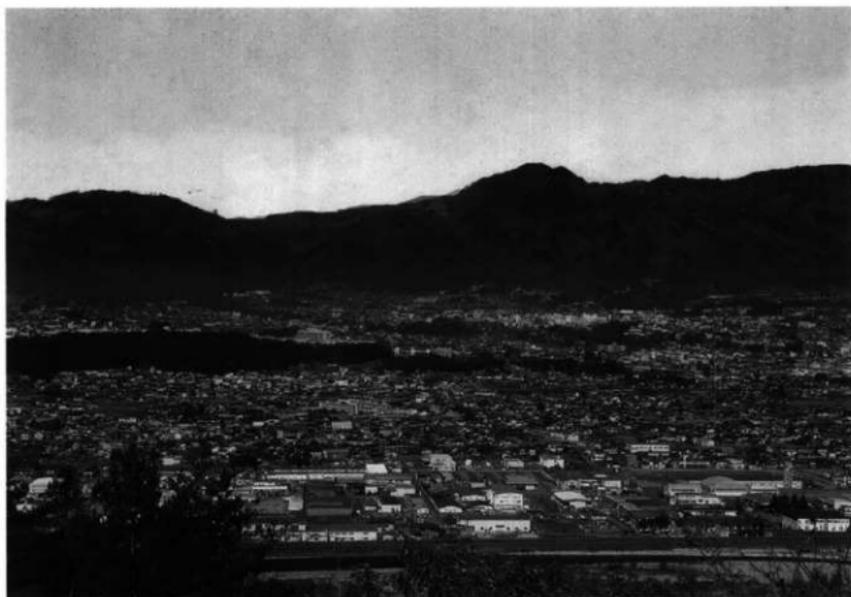
近隣の小河川が氾濫し、土石流が飯田市中心市街地の知久町までも及んでいる。羽場地区から丸山地区にかけての一带は、頻繁ではないものの幾度か被災した地域であり、地質学的な長い視点で見れば、現在も発達中の扇状地といえる。縄文時代から現代に至るまで、繰り返し人々の生活が営まれた地域といえるが、こうした地理的な状況を踏まえて、過去から現在までの土地利用を考える必要がある。

《主要参考・引用文献》

- 下伊那地質誌編纂委員会 1976 『下伊那の地質解説』
- 伊那谷自然友の会・飯田市美術博物館 1991 『伊那谷の土石流と満水 三六災害40周年』
- 飯田市教育委員会 1994 『中村中平遺跡』
- 飯田市教育委員会 2003 『羽場曙遺跡・方角東遺跡』
- 飯田市教育委員会 2004 『飯田城下町遺跡』
- 飯田市教育委員会 2006 『飯田城下町遺跡』
- 日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会 1970 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書
-飯田地区-』
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 全一卷(4) 遺構・遺物』



版



遺跡遠景



調査前



I区上層



II区上層



III区上層



IV区



I区下層



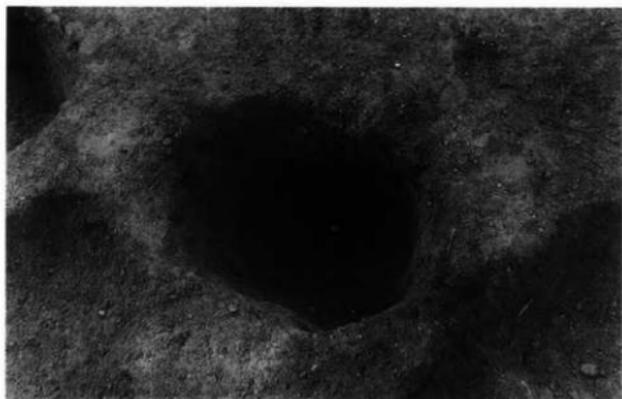
II区下層



III区下層



III区小穴群



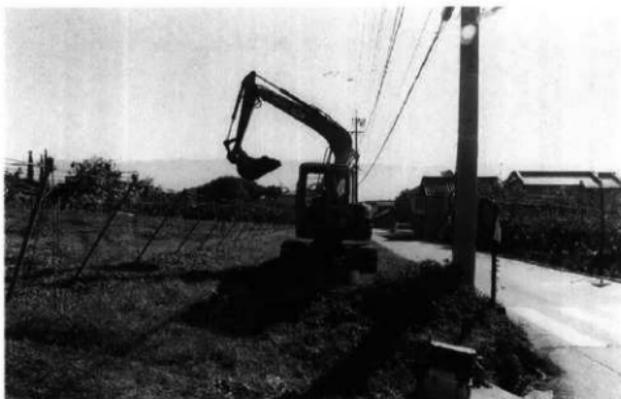
土坑01



土坑02



不明遺構01



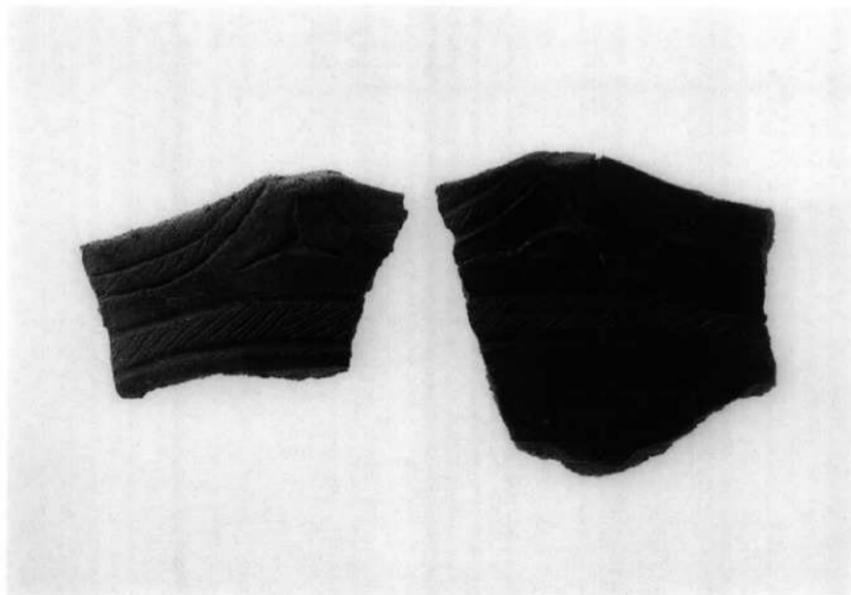
重機作業



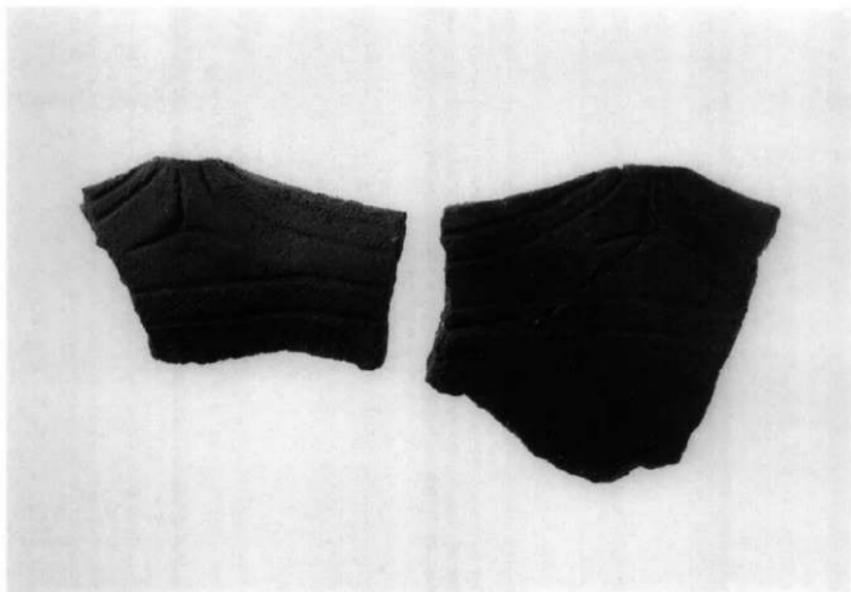
測量作業



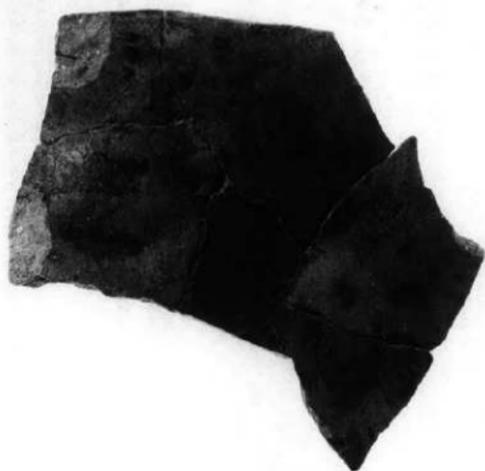
掘削等作業



土坑01出土遺物



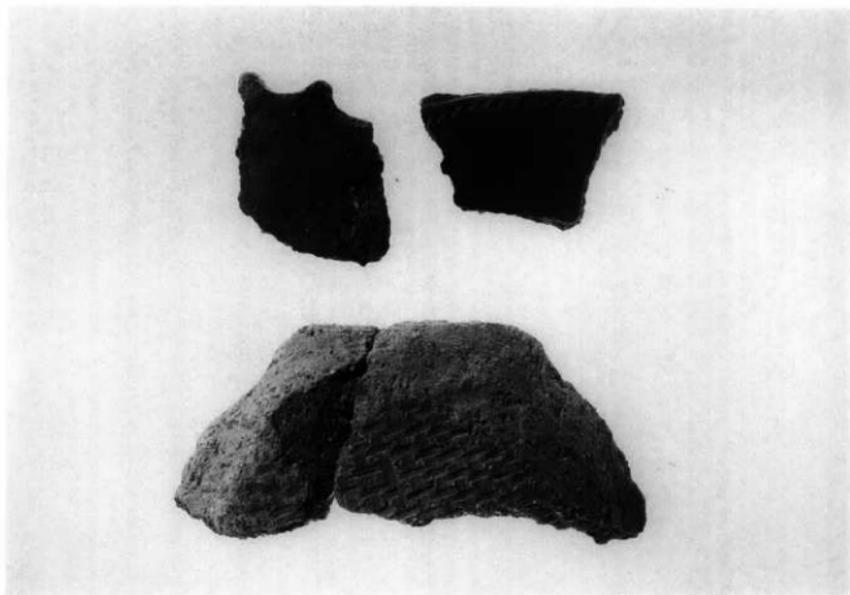
同上(裏面)



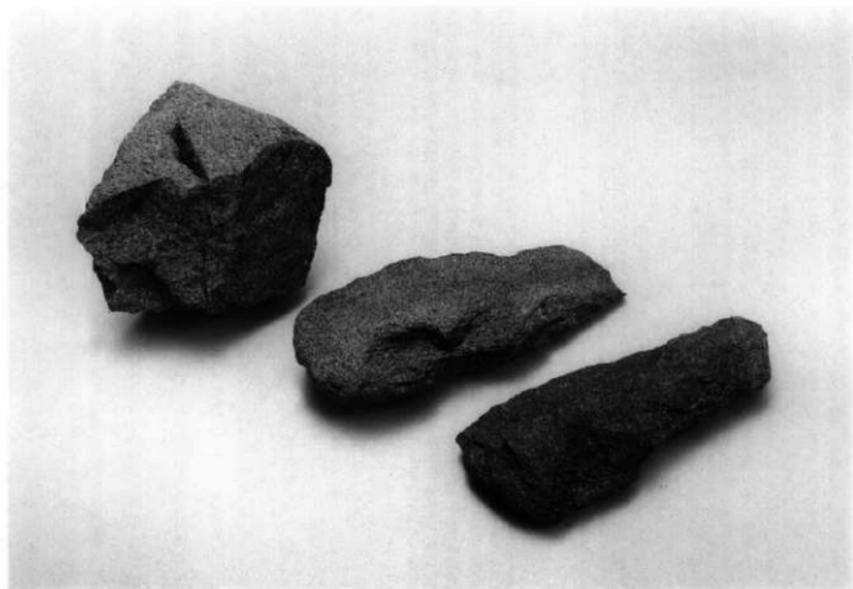
土坑02出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



同 上

報 告 書 抄 録

ふりがな	すなはらいいせき						
書名	砂払遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	羽生 俊郎						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Ⅷ0265-22-4511						
発行年月日	西暦2008年3月(平成20年3月)						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 遺跡番号					
すなはらいいせき 砂払遺跡	いいでしすなはらい 飯田市砂払町2丁目	20205	35° 31′ 10″	137° 48′ 31″	平成18年 11月8日～ 平成18年 12月18日	284㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
砂払遺跡	集落址	縄文時代晩期 中近世	土坑 柱穴	土器・石器			
要約	縄文時代晩期の遺物が出土した。						

砂 弘 遺 跡

2008年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地

長野県飯田市教育委員会

印刷 株式会社 秀文社
